艦これのSS（仮）

bear中尉

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦これのＳＳ集にする予定！

艦これのＳＳを書いてみたくて書きました。

お手柔らかにお願いします。

目次

いつか、あの空で（1）…1
いつか、あの空で（2）…5
いつか、あの空で（3）…10
いつか、あの空で（4）…15
いつか、あの空で（5）…19
いつか、あの空で（6）…22
いつか、あの空で（7）…25
いつか、あの空で（8）…28
いつか、あの空で（9）…31
いつか、あの空で（10）…35
いつか、あの空で（11）…38
いつか、あの空で（12）…41
いつか、あの空で（13）…44
いつか、あの空で（14）…47
いつか、あの空で（15）…51
いつか、あの空で（16）…55

いつか、あの空で（1）

あの日の事は、はっきり覚えている。
当時、この国は世界を巻き込んだ、それはもう大きな戦争の最中であった。
その時、俺は艦上戦闘機のパイロットの一人だった。
その戦いの中で俺達は必死に戦っていた。
当時は皆が皆そうだった。
その一人だったに過ぎない。
しかし。
突如現れた人類共通の敵、深海棲艦による攻撃で、世界は戦争どころではなくなった。
だが、いくらそんな敵が現れたからと言っても、我が大日本帝国を含め世界各国がはいそうですかと皆仲良く手を取り合う事は無かった。
協力はしないが、相手もしてはいられない。
その為、人類は一時的に停戦した。
俺の記憶からこびりついて離れない、あの日。
四月の十八日。
その日は、対米軍前線から本国へ山本長官がご帰還なされる為、その護衛任務に就いていた時だった。
この所、何故か米軍からの攻撃は止み、また近海に敵空母はおろか敵影反応一つ無かった。
なのでそこまで多くの護衛は必要無いだろうとの事で、俺を含め六機の零戦が護衛任務に就く事になった。
念には念をと索敵機もかなり飛んでいたが、総じて反応は無かった。
しかし、現実は非常だった。
今となっては全てを覚えているわけでは無い。
あれはもうかなり前の事になるのだから。
しかし、それでも。

あの日、謎の飛行物体に攻撃されて火を噴きながら堕ちていく山本長官の乗る一式陸攻を。
唯々、零戦のコクピットの中から何も出来ず眺めていた時の事だけは。
はっきりと覚えている。
忘れようとしても、その度に夢に見るあの光景だけは。
きっと、死ぬまで忘れる事は無いのだろう。
後で分かった事、というかその当時の深海棲艦は存在すら認識されていないまさしく正体不明の敵だったのだが。
その日に一式陸攻を攻撃してきたのは空母一隻に駆逐艦二隻という少数部隊だった。
その部隊の艦載機のようなものが我々に襲いかかっていたのだ。
その後海軍は長官の仇と、謎の敵に総攻撃を仕掛けた。
結果、空母一隻は逃したものの深手を負わせ、駆逐艦二隻を撃破する事に成功した。
その残骸を回収して分かった事は、驚くべき事にこの敵は生物によく似た構造をしている事だった。
しかし同時に、何故この様な構造を備えるに至ったのかは今でも不明だが、戦艦や空母と言った艦船の特徴も兼ね備えている事が分かった。
人間ほどの大きさでありながら戦艦クラスの火力や装甲、果ては空母クラスの艦載機運用能力を持つとは。
それに人間ほどの大きさなので索敵機にも引っかかり辛くて敵わない。
苦戦もするというものだ。
そしてその後、その生物を解剖・解析し、その情報を元に深海棲艦に対抗する為に造られた存在が。
後に言う、艦娘だった。
それからは少しずつだか、前線を押し戻せて来ている。
それと共に、過去の兵器の殆どは無用の長物となっていった。
艦載機などは艦娘と同時期に現れた謎の生命体、通称『妖精』の大

きさに合わせた物が運用される様になり、今では海軍は殆ど生産を受注していない。
それもそうだ。
今や海軍の主力は艦娘なのだから、彼女達に運用出来ない艦載機なんて必要無いのだろう。
第一航空戦隊、通称一航戦ですら解体されてしまった。
まぁ、主力の空母四隻が沈んでしまっていた当時の第一機動部隊なんて、もう既に解体されていたようなものだが。
同じく護衛に就いていた五名は、山本長官の仇討ちの戦で華々しく散っていった。
しかし、俺は、俺だけは生き残ってしまった。
作戦終了後、このまま着陸失敗にかこつけて墜落してしまおうか。
そこまで考えていた。
その時は今まで誇らしく思っていた空戦の腕を恨んだものだ。
俺はその後二ヶ月の謹慎の末、汚名をそそぐべく、最前線へ志願するつもりだった。
そして、罪滅ぼしの為に華々しく戦い、そこで死するつもりだった。
だが、そうはならなかった。
上官から告げられるのは、長ったらしく堅苦しい命令。
それを要約すれば、
「お前はもう、必要無い。」だった。
あまりに冷たく言い放たれるそれに、俺は不思議と納得できた。
同時に、俺はこの罪悪感を、一生抱えて生きていかなくてはならないのだ。
そう覚悟した。
いや、のうのうと生きていくつもりは無かった。
軍をやめた時点で死のうと、心に決めていた。
しかし、そんな俺を引き取った部隊があった。
それが深海棲艦を解剖して、その情報をまとめそれぞれを分類し、それらを元に艦娘を生み出した実験部隊、７３１部隊だった。
７３１部隊の面々は次に、艦娘の艦載機に、何とか海軍の熟練搭乗

員達を搭乗させられないかと考えた。
そして辿り着いたのが、人間の妖精化だ。
正直、初めて聞いた時は思わず馬鹿か、と口に出してしまいそうだった。
だってそうだろう？
人間を妖精にするという、荒唐無稽な計画を話されて、それは良いと納得出来る奴はそうそういない。
だが、それで死ぬのも悪くない。
というより、どうでも良くなっていた。
だから、その実験体第一号に促されるまま志願した。
どうせ失敗するんだろうな、と思っていた。
今となってはそれは盛大な振りだったのかもしれない。
前置きが長くなってしまった様だ。
つまり、まとめると・・・
俺は、妖精に変身できる様になった。

いつか、あの空で（2）

「暑い、な。」
軍のトラックの荷台で揺られながらぼそり、と一人呟く。
荷台には俺以外に誰もいないので、当然独り言だが。
俺に施された実験は成功し、妖精の体とその大きさに合わせた艦載機の慣熟訓練も済ませた俺は、とある鎮守府に配属となった。
鎮守府の名前は何だったかな。
忘れてしまったな・・・。
まぁ、死ぬ前にいた土地の事を記憶に刻むというのも良いかもしれないな。
現地に着けば誰かに聞いておこうか。
ああ、こんな時でも空は、綺麗だな。
そう思いながら俺は空を見上げる。
「あら、下士官の分際でその程度も我慢しないとは、いいご身分じゃない。」
声を掛けられ目線を送れば、トラックの助手席から顔を出す一人の少女。
彼女も俺と共にその鎮守府に配属される艦娘だ。
いや、この場合添え物は確実に俺の方だろうな。
艦種は装甲空母、名を『大鳳』。
深海棲艦に対抗する為の艦娘の中でも、切り札的存在の一人。
大本営にてエリートとしての教育を受けた、まさに文武両道の鏡。
とまぁ、色々と噂は聞いている。
加えて地獄耳とは、向かう所敵なしですね。
あちらも、大本営の連中から俺の噂は聞いているのだろう。
ほぼどころか全て悪評だろうが。
さっきの態度ですぐ分かった。
それでも、その考えを払拭しようとも、出来るとも思わない。
それに彼女は配属されていきなり大尉相当官に抜擢という超好待遇だ。

対して俺は上等飛行兵曹。
上官への口答えと捉えられても面倒臭い。
「・・・はっ、申し訳ありません。」
「あら、怒る事すらしないのね。全く、情けない。精々邪魔にはならないでよね。」
「承知いたしました。」
そうして会話らしき物も途絶え、沈黙が続く中、俺は唯々空を見上げていた。
俺は今度こそ、この罪を死をもって償えるのか・・・。
そればかりを、考えていた。
鎮守府に着くと、かなりの数の出迎えがあった。
しかし、それは俺に対してではなく、現海軍において唯一の装甲空母である大鳳に対してだった。
そして俺に向けられる何こいつ何者？の様な視線。
一応俺も恐らく海軍唯一の半人間半妖精といった改造人間なのだが、とは思ったが、この待遇には別に何も思わなかった。
鎮守府の艦娘数名が大鳳を提督室に案内するのを見て、それからはぐれてしまえば俺を案内するような者もいるはずがなかったので、俺はその一行の後を追った。
その時、不審者扱いされたけど特に気にしていない。
ほ、本当だってば、嘘じゃないよ。
「やぁ、ようこそ。私がこの鎮守府の提督、菅野直だ。」
ビシッと敬礼で挨拶をしてくる提督。
傍には秘書艦というものだろう、黒髪の美人が提督のそばに控えている。
それに応えるように、大鳳と俺も敬礼しながら挨拶をする。
「わざわざ出迎えまでしてくれて感激です。提督、あなたの機動部隊に勝利を！」
「・・・杉田庄一上等飛行兵曹です。宜しくお願い致します。」
「ああ、大いに期待しているよ。まずは、長旅で疲れただろう、ゆっくり休むといい、長門。」

「ああ。」
長門と呼ばれた艦娘が、大鳳と俺にそれぞれ書類と鍵を手渡してくる。
「これが当鎮守府の地図になる。慣れるまでは持っていたまえ。そして今渡したものが諸君の部屋の鍵だ。今日は休みにしているが、明日からは早いので、早めに休息を取るように。」
「はい！」
「了解しました。」
ありや、この地図、鎮守府の名前書いて無いな。
残念無念。
「では、戻って良いぞ、艦娘達が諸君を待っているだろうしな。だが、くれぐれも羽目を外し過ぎないように。では、解散！」
「ありがとうございました！」
「ありがとうございます。」
そうして提督室を後にしようとすると、俺だけ呼び止められた。
足手まといになるなよとか、そんな事かな。
そう思って早くも憂鬱になりかけたが、提督がかけてくれた言葉はそうではなかった。
「あの事件の事は、気の毒であった。しかし、あれからかなり経つ。そろそろ忘れろ、とは言わないが、そこまで思い詰めなくても良いのでは無いか？」
俺の不意を突くその言葉に、思わず目を見開いて驚いてしまった。
しかし、その優しい言葉を受け取る訳にはいかない。
俺は、それくらいの事をしてしまったのだ。
そのくらいは自覚している。
「ありがとうございます提督殿。でも、大丈夫ですから。」
そう言って俺は笑う。
俺としては笑えてるつもりだったのだが、それを見る提督の顔は苦虫を噛み潰したような、苦々しい顔だった。
まるで何かを言うのを堪えているような、そんな表情。
見るに見かねて俺はその後すぐ退室した。

その足でそのまま私室へと向かう。
はずでしたよ、はい。
途中地図を貰ったにも関わらず無くしてしまい、右往左往していると、食堂に辿り着いた。
食堂では、大鳳の歓迎会が行われていた。
参加している誰もが凄く楽しそうで、その中にはきっと。
俺が混ざる事は永劫あり得ないのだ、と改めて確認出来た。
そっと、誰にも気付かれぬ様その場を後にした。
それでもまだ私室を発見出来ず彷徨い続けていると、二人の少女を見かけた。
「だからね、司令官はもっと私を頼ってくれても良いのよ！」
「なのです！もっと私達を頼って欲しいのです。」
なんか見つかると面倒臭そうだ。
そう思った俺は回避行動を取る。
「ん？あれは・・・」
「え？何なのです？あ、あれは・・・」
しかし、時すでに遅し、発見されてしまった。
「「不法侵入者！」」
「違う、断じて違う。」
確かに周りをキョロキョロと見渡していたのは認めよう。
しかし、それだけで通報されても困る。
第一、提督に先程大丈夫だと伝えたばっかりなのにいきなり憲兵のお世話になるとかとんだ笑い者だ。
まぁ、元から笑い者というか厄介者なのだが。
「この度この鎮守府に配属された、杉田庄一上等飛行兵曹です。宜しくお願い致します。」
「あー、あなたが噂の。堅いわね、もっと馴れ馴れしくしても良いのよ？」
「そうです、私達は仲間なのですから！」
「いえ、そういう訳には。それよりも、出来れば一つ頼まれて欲しいのですが。」

すると二人はパッと目を輝かせながら急かしてくる。
「何⁉？この雷に任せなさいッ！」
「電もお手伝いするのです！」
「あ、ありがとうございます。では・・・」
「何？」
「なのです？」
俺は申し訳無さそうにボソッと呟く。
「迷ってしまって・・・私の寝床、どこか分かりませんか？」

いつか、あの空で（3）

あぁ、どっと疲れた。
俺はやっと辿り着けた私室の布団で寝転がる。
あの後雷電姉妹は笑い転げながらも（ほぼ雷。でも電もクスクス笑ってばかりだった。）しっかりと俺を案内してくれた。
俺はその二人に礼を言って別れ、今に至る。
「かなり情け無いな。それでも、いつ振りだろうなぁ。人の好意に触れるのは。」
一人しか部屋にいないため、自然と独り言が出てしまう。
あの時以来、俺はずっと生きた心地がしなかった。
７３１部隊の時とも違う。
大体、７３１部隊だって、まさか俺を助ける為にこんな事をした訳でもないだろうし。
あんな純粋な善意に触れたのは、いつ振りだろうな。
とても暖かい、人を思いやる気持ち。
再びそれに触れる事があるとは。
この人生も捨てたものではないな。
そう思いながら、次第に俺は眠りに落ちていった。
そして見るのはいつもの夢。
いつもと変わらない、あの時の悪夢。
何回見たか覚えていないその光景に、俺は幾度となく叫んでいた。
許してください、と。
「・・・・・・ハッ！」
俺は汗だくになりながら飛び起きる。
息は荒くなり、心臓はばくばくと高鳴っている。
ふと見上げれば、時計は７時過ぎを指していた。
晩飯の時間だが、食欲はなかった。
それもそうだ。
前の所でも食堂で他の人と会うのが怖かったから、訓練にかこつけてわざと時間をずらして遅い時間にご飯を取っていたのだ。

お陰でその習慣が染み付いていた。
取り敢えず、自主訓練でもしてこよう。
そう思い、息を整えてから俺は私室を後にした。
向かった先は工廠。
ここで何かしらの廃材を貰ってからそれを持ち上げるなり素振りなりしておこう、と思ったのだ。
工廠へ向かう途中、誰かとすれ違うかな、と思ったのだが、流石は晩飯時、誰も見かけなかった。
流石に勝手に入るのは気が引けるので、工廠には誰か居て欲しいんだけどな。
そう願いつつ、俺は工廠に向かって声をかける。
「誰か居ませんかー、やっぱり居ないのかな。晩御飯の時間だしなぁ。」
仕方無い、帰るか。
そう思った時、何かが動いた。
「ん？」
「・・・おりゃあ！」
その何かは、何かを俺の頭目掛けて振り下ろして来る。
それを俺は目視し、反射で回避しかけた後、またその軌道に頭を戻した。
出来れば空で死にたかったけど、仕方無いか。
しかし、その後ろ向きな願いが叶う事はなく、寸前でピタリと止まった。
よく見れば寸止めされているそれは工具の一種であるスパナだった。
そしてそれを構える作業着姿の人物が訝しむ様に尋ねてくる。
「あなた、まさか死ぬ気？」
「まぁ、そうですね。」
特に否定する事もないので、そのまま答える。
「もしかしてあなたが、今回鎮守府に配属される改造人間の？」
「そうですよ。まぁ、艦娘も改造人間みたいな物だと思うんですがね。

改めて、杉田庄一上等飛行兵曹です。宜しくお願い致します。」
「兵装実験軽巡、夕張よ。ごめんなさい、てっきり不法侵入者かと思ったわ。ていうか、あの後でよく自己紹介出来るわね。」
「いや、別に気にしてないからですかね。そんな事より」
「そんな事じゃないわよ！・あなた死ぬ所だったのよ⁉？・なんでそんなに飄々としていられるのよ！」
なんか謝ったり怒ったり忙しい人だな。
そんなの、本当に気にしてないからに決まってる。
「そんな事ですよ。それよりそうだ、機銃とか砲身とかの残骸とかありません？」
「え？・ま、まぁ、探せばあると思うけど。何に使うの？」
「何って、訓練ですよ。出来れば恵んで頂けると嬉しいのですが。」
「別に構わないわよ。ほら、あそこに置かれているわ。」
その方向を見ると、かなりの数の壊れた兵装が山積みにされていた。
そこへ向かい、その中からお目当ての物を探し出す。
しばらくして、目的の物自体は見つかった。
しかし、見つかった機銃は零戦についていた物とは違い、妖精用に造られていた零戦の物だった。
何が言いたいかというと、体を鍛えるには余りにも小さく、そして軽かった。
「え、えぇ～。どうしたものかなぁ。ん？」
目に付いたのは、その機銃を取るために色々な物を引き抜いた後に出来た窪み。
そこから覗いていたのは、手にする機銃と同じ形だが、それより遙かに大きかった。
「ん、んしょ、っとぉ。」
なんとかそれを引き抜く。
すこし錆びて来ているものの、紛れもなくそれは人間用の零戦の機銃だった。
これなら使えそうだな。

すぐにガラクタの山の崩落を警戒したが、特に無さそうだった。
ほっと一息ついてその場を後にし、夕張の元へ向かう。
「すみませんがこれ、貰ってもよろしいでしょうか？」
「別に構わないわよ。」
「では、有り難く頂戴します。」
「その代わり。」
「何でしょうか？」
「その敬語をやめて。それで手を打つわ。」
確か艦娘という者達はそれだけで少尉相当官くらいはあったはずだが。
上官にタメ口というのはちょっと・・・。
まあ、本人の希望なら仕方無いか。
「はぁ、分かりまし・・・分かった、恩に着る。」
「よろしい。では、ご飯を食べて来るわ。」
「行ってらっしゃい。」
「え？あなたも行くのよ？」
「・・・・・何故に？」
「まだじゃないの？」
「いや、先ほど頂いて」
ぐぅ～、と俺の腹の虫が鳴く。
この時ほど自分の生理現象に嫌悪感を抱いた事はありません。
どうやら鍛え方が甘かったようだな・・・。
「ほら、我慢してないで行くわよ。」
「いや、俺は訓練が」
「どうせ今日は休みでしょうに。それとも、私と行くのがそんなに嫌？」
「あ、いや、そんな事は。」
スパナで殴りかかる様な奴と落ち着いて飯が食えるか。
その言葉が喉まで出かかっていたが、先程自分自身でそんな事と言った手前、それを指摘するのも男らしくないだろうな。
「分かったよ、お供しますとも。」

「よろしい。あなたには色々聞きたい事があるのよ。」
「・・・・・・はぁ。」
「何よ、その露骨に嫌そうな顔。」
「どうせ、俺から聞く事なんて分かりきっているからね。嫌な顔しないほうがおかしいさ。」
夢にも出るくらいトラウマなので触れないで欲しいんだけど。
「それでも、これから仲良くやっていく人の事だから知っておきたいのよ。」
「・・・・・・了解しました。」
「敬語。」
「了解。」
そうして俺は夕張の連れ添いで食堂に行く事になった。
流石に食堂に7．7ミリ機銃は持って行けないな・・・・・・。

いつか、あの空で（4）

食堂に着いて思ったのは、人が多いって事だった。
ここは軍じゃないのか。
規則正しくなくて良いのか。
なんで飯食い終わっても居座って喋り続けているんだ。
そんなの歓迎会だとかそういう流れでしか許されないぞ。
あ、そういや今日は俺と大鳳の配属初日じゃないか。
あまりに歓迎されなさすぎて忘れていた。
取りあえずそんなツッコミを我慢しつつ、夕張の後を追い晩御飯を受け取りに行く。
その途中の好奇の目にさらされる時間がかなり地獄だった。
何ここ男少な過ぎるっていうか提督以外に男と会っていないぞ。
なんとか晩御飯を受け取り、食堂で働く間宮さんを始めとした面々に挨拶を済ませ、夕張の元へ急ぐ。
「すまない、待たせた。」
「まぁ、初日だし、質問攻めとかに遭うわよね。」
「皆こぞって俺の事不審者扱いしなければもっと気軽に挨拶を済ませられたのだがな。」
「な、なんの事かしら。」
雷電姉妹、夕張に続いて食堂や調理場の面々と、見られたほぼ全ての艦娘に不審者扱いされるとは。
先が思いやられる。
「だって、大鳳の事は聞いていたけど、あなたの事は初めて知ったもの。」
「・・・提督は皆には伝えてなかったのか？」
「いや、別に。でも昨日、「あっやべっ。」って言いながら秘書艦の雷と第六駆逐隊を連れて空き部屋をもう一つ準備していたわね。それでゴタゴタしてて忘れてたんじゃない？」
「・・・・・・なるほど。」
あー、これは忘れられてた感じですわ。

どうりで会う艦娘ほぼ全てに「軍服着てるけどこいつ誰？」って視線で見られるはずだよ。
てか、雷電姉妹が俺の私室知ってた理由それか。
「はぁ、なんかもう良いや。取り敢えずご飯を頂こう。では、頂きます。」
「それもそうね。頂きます。」
「お、ここのご飯美味し「しれぇこっち！こっちに不審者が！」
もう勘弁してくれよ。

その後、見るに見かねた提督殿が鎮守府ほぼ全域に渡り放送を入れる事によって俺が通報されるのは格段に少なくなった。
まぁ、この事態は殆ど提督殿の所為だけど。
この騒ぎを片付け、席に戻った時には晩御飯はすっかり冷めており、夕張は居眠りをしていた。
こんな所でよく寝れるものだな。
部屋に帰ってから寝れば良かったものを。
まぁ、今起こすのも可哀想だし、先に飯を食べよう。
そう思い俺はすっかり冷めてしまった味噌汁を飲んだ。
あ、美味しい。
次は是非とも温かいうちに飲みたいものだ。
飯を全て食い終えても夕張は起きなかった。
俺は間宮さんから先程のお詫びと配属祝いを兼ねてコーヒーを頂いた。
コーヒーはあまり飲んだ事は無かったが、ここのコーヒーはなかなか美味しいと感じた。
さて、どうしたものか。
貰ったコーヒーを啜りながら一人悩む。
俺としてはこの後私室に戻り軽く風呂に入った後、慣熟訓練の時に空母着艦訓練などでお世話になった鳳翔さんの所へ向かいたいのだが。
「隣、良いかね？」

「あ、提督殿。勿論であります。」
俺が立ち上がり敬礼しようとすると、提督はそれを片手で制した。
「菅野で良い。そう固くならなくても、ここでそんな事をする者などほぼ皆無だぞ？」
「それは軍としてどうかと思いますが・・・。」
「で、どうかね？上手くやっていけそうかね。」
「・・・それはまだ分かりません。何せ、初日なのですから。」
提督殿が前もって俺の配属の事を知らせてさえいればもっと楽でした。
その言葉が危うく喉まで出かかって慌てて引っ込めた。
「まぁ、それもそうだな。所で、次の出撃だが・・・。」
「はい。」
「君には、大鳳の艦載機で出撃してもらう。機体の方は、すまないがしばらくは零戦の五二型を使ってくれ。配備予定の紫電改の開発が遅れていてな。いやぁ、運が無いなぁ。」
「開発・・・運？」
なんだ、この鎮守府はそんなに技術力があるのか？
運ってなんだ、開発に運が関連してるのはなんなんだ？
それはそうと、五二型か。
悪くない、と思う。
むしろ二一型とかを回されなかっただけ良いだろう。
「了解しました。小隊などはすでに組んであるのですか？」
「だいたい決まっているはずだ。まぁ、君程の技量ならば小隊長は確定ではないかな。」
「恐縮であります。」
ここで謙遜してしまえば、提督の見立てを否定する事になる。
そんな事で提督との仲が険悪になるのは意味が無い。
「鎮守府近海で訓練をしてから改めて出撃なので、すぐさま実戦という事はない。存分に英気を養っておきたまえ。」
「了解しました。提督殿、一つ頼みたい事があるのですが・・・。」
「ふむ、何かね？」

「さっきの地図、もう一枚頂けませんか？」

いつか、あの空で（5）

「ここか、鳳翔さんの小料理屋は。いやまぁ、なんかそんな店とか似合いそうって思いはしたけど。」
あの後提督と別れ（夕張は提督に任せた。）、私室に戻り新しい軍服に着替えて向かった先は『食事処　鳳翔』。
地図を貰った後改めて鳳翔さんの居場所を聞こうと思ったら、地図にそのような店があると発見した。
これで居なければ面白いがな、主に俺の運が無さすぎて。
これは開発で紫電改が出ないかもしれん。
幸い店の灯りは点いているので、最悪誰かは居るだろう。
そう思い、店の扉を開ける。
そしてテーブル席の方から聞こえてくる大歓声。
奥のテーブル席で数名の艦娘が酒盛りをしていた。
え？この店の防音設備凄い。
どうやら大鳳の歓迎会は食堂からここへ場所を移しつつ今の今まで続いていたらしい。
と言っても、この店の中に駆逐艦などの艦娘の姿はなく、恐らく二次会とかなのだろう。
あ、訂正。
我店ノ奥側ニ駆逐艦ヲ発見セリ。
あ、違うあれ大鳳さんですわ。
背丈で見間違えた。
見なかった事にしよう。
それに、うるさいしここに長居はしたくない。
調理場にいる鳳翔さんに挨拶して早めに寝よう。
そう思い俺はカウンター席へ向かう。
そして、鳳翔さんへ声を掛ける。
「ご無沙汰しています、鳳翔さん。」
「あ、杉田さん。お久しぶり、でもないですね。訓練の時以来ですか？」

「ええ、その節はお世話になりました。空母への着艦はどうにも難しくて。」
「何を言っているんですか、すぐコツを掴んでからはずっと成功させていたではありませんか。」
「いやあ、なんとか物に出来ましたよ。これも鳳翔さんのお陰ですね、ありがとうございました。それと、またこれからお世話になります。よろしくお願いします。」
「ええ、こちらこそ。この鎮守府に配属になるのは知っていましたが、今日だとは知らずびっくりしましたよ。」
「提督殿が伝え忘れていたみたいですね。まぁ、気にしていませんよ。」
　その時、酔っ払いの艦娘達からなぜかこちらへ野次を飛ばす。
「おっ、あんな所に不審者が居るぞ！」
「まぁ、あんなん私達なら返り討ちにしてやるけどね！」
　そして、テーブル席から笑いが巻き起こる。
　俺は両手で顔を覆いながら、繰り返し呟く。
「大丈夫です、気にしていません、問題ないです・・・。」
「・・・せめてこれで涙を拭いたらどうですか？」
　あんなんって何だよ、あんなんって・・・。
　そう言っておしぼりが差し出されるが、丁重にお断りした。
「鳳翔さーん！お酒もっと下さーい！」
「あとおつまみも追加お願いしまーす！」
「はい、ただいま。ですが、少し飲み過ぎてはありませんか？」
「大丈夫だって、この隼鷹を舐めてもらっては困るよー！」
「それにここには明日非番の人しかいませんから。」
　歓迎会の面々から注文が入る。
　非番だけだから問題は無いのだろう。
「あ、あの私、明日訓練があるのですけど・・・。」
　何だか大鳳が俯いて何かを呟いた様子だが、呑んだくれ共が気付く様子は一切無い。
　なんて言っていたのかは俺には定かではないけどね。

呑んだくれがうるさすぎて聞こえない。
「では、鳳翔さん、俺はこれで。」
「もう帰るのですか？何か食べたりは？」
「また今度にしますよ。明日訓練がありますし、それにどうせなら静かな時に鳳翔さんとゆっくり話したいので。」
「そうですね、それが良いかも知れません。では、訓練頑張って下さいね。楽しみにして待っていますから、出来るだけ早めに来てくださいね？」
「分かりました、善処します。それでは、お疲れ様です。」
「ええ、お疲れ様です。」
そうして俺は『食事処　鳳翔』を後にした。
そのまま帰りたかったが、機銃の残骸を工廠に忘れて来ていたのでそれを取りに戻り、そして私室へ戻った。
何故か少し目が冴えているような感じもしたが、かなり歩き回ったせいかそれもすぐに感じなくなり、程なく眠りに落ちた。
そうして俺の配属初日は幕を閉じた。

いつか、あの空で（6）

配属から二日目、鎮守府で初めて迎える朝である。
誰が何と言おうと朝だ。
例え太陽が昇っていなくても朝だ。
いや、悪夢を見て早く目が覚めたとかでは断じて無い。
しかし、息を整えているうちに目が冴えてしまったので、昨日出来なかった自主訓練でもやろう。
そう思い俺は私室から出た。
外は薄暗かった。
やっぱり朝ではないなこれ。
もう少しで朝だと思うけど。
構わず俺は機銃の残骸を持ち、一人鎮守府の外れの方へと向かう。
体力作りも兼ねて、走りながら。
うお、重っ。
着いた頃には既に汗だくで息も切れていた。
いくら残骸と言えども重いことには変わりはない。
しかし休んではいられない。
こんな事では。
また奴らに遅れを取る。
そんなのは二度とごめんだ。
「・・・・・・くそッ。」
そう呟きながら俺は素振りを開始する。
そしてしばらくして、太陽が昇り始めてきた。
そろそろ起床時間かな。
俺は私室に戻って軽く風呂に入って汗を流してから朝食を頂こうと、機銃の残骸を置いて来た道をまた戻って行った。
また走って。
「はぁ、はぁ、はぁ。キッツい・・・な。」
私室周辺まで戻ってきた時にはクタクタだった。
しかし、腕などに筋肉痛特有の痛みはない事からやり過ぎてはいな

いと思う。
息が整えば大丈夫だろうが、すぐには整わないな。
これから訓練だから、少しばかり休んでから食堂に向かおうかな。
ふと周りに視線を移せば、誰かが走ってくる。
朝の運動かな、ご苦労様だな。
走ってくるそれは、ラフなジャージ姿の大鳳さんだった。
ああ知ってた、なんか昨日配属されてからよく会うなあとは思ってたよ。
ここまでだとさすがに呪いなんじゃねえかって思ってしまう。
「・・・・・・・あ。」
「・・・・・・・おっ、どうも、大鳳殿。」
整わない息もそのままに、俺は敬礼する。
俺の敬礼を気にすることなく、大鳳が質問してくる。
「あなたも朝のランニング？」
「まぁ、そんな所であります。」
「へぇ、意外ね。ところであなた、今日の訓練の部隊編成は聞いていて？」
「大鳳殿の所属としか伺っておりません。」
自分で聞いておきながら、大鳳は興味無さげに答える
「あ、そ。私としてはあなたを部隊に加える気は無かったのだけど、提督に頼まれてしまって、仕方無く、ね。あなたは私の零式艦上戦闘機五二型部隊の第五小隊隊長よ。訓練とはいえ、気を抜かないでよね。」
そこまで聞いてないのにえらく饒舌になるじゃないですか。
特に私としてはって所は必要ないですよね。
「了解しました。それで、第五小隊の列機の方達はどちらですか？」
「聞いてどうするのよ。それより、朝食を頂いたら訓練へ向けた会議があるから遅れないでよね。」
「はい、分かりました。では、これで。」
「ええ。」
こんなにも俺に対して嫌悪感を抱いている艦娘の元で戦うのか。
流石にこれは嫌だな・・・。

まぁ、なんとかするしかないか。

いつか、あの空で（7）

「ねぇ、杉田さん。」
「・・・・・・。」
「逃がさないわよ？」
食堂にて。
入ってからご飯を受け取り、いざ席に向かおうとした時、夕張を発見してしまった。
重なる視線、そして刹那。
俺は笑顔で怒る人程怖いと体験する羽目になった。
「なんで私が怒っているか分かるよね？」
「・・・全く分かりま「あ？」した・・・。」
あっ、怖い。
悪夢とかとは違う方向で怖い。
「全く、何も言わず先に帰っちゃってさあ。私言ったよね？聞きたい事あるって、言ったよね？」
「は、はい。言っていましたね、ええ。」
「いくら提督が居たとは言え、なんで声を掛けずに帰っちゃったのよ？」
正直言って、鳳翔さんの所へ用事があった為、と言う事も出来た。
しかしそれでは鳳翔さんに責任転嫁してしまう。
しかもその後しつこく質問攻めに会うだろうな。
ここはいっそ突き放した方が良いかもしれない。
「うるさいな、喋りたくないと言っているだろう。」
「・・・・・・え？」
俺の一言に、夕張は完全に虚を突かれる。
その隙に俺は誰も座っていなかった四人用のテーブルへ向かう。
朝早くて助かった、これで座る所が無かったらかなり情け無い。
そしてこれで、しばらくは話し掛けては来ないだろうな。
見知った仲ならまだしも、昨日知り合ったばかりなのだから。
「そう、そういう態度に出る訳ね、それならこちらにだって考えはある

わ、青葉。」
「ここに。取材の依頼ですね？そして、これで私がスクープを掴めば？」
「新型のカメラを開発してあげるわ。」
「仰せのままに。喜んでその命、受けさせていただきます！」
夕張はどこからともなく現れた桜色の髪の毛をした艦娘と何やらコソコソと話し始める。
いや、本当にあの艦娘はどこに隠れていたんだ？
艦娘には忍術まで実装されているのか⁉？（震え声）
「まぁ、気にしても仕方無いか。頂きます。」
「頂きます。」
こだまでしょうか？いいえ、何で？
見れば、夕張と先程の艦娘が俺の向かいの席へ座っている。
解せぬ。
（ドヤァ・・・。）
そして何故か二人とも謎のしたり顔である。
より一層解せぬ。
ここは一つ先手を打とう。
「初めまして、杉田庄一上等飛行兵曹です。」
「あ、これはご丁寧にどうも～。私は重巡洋艦の青葉です～。」
「このタイミングですぐに自己紹介するって、あなたなかなか肝が据わってるわね。」
「ズッ・・・、まぁ、そうでないとやっていけないからな。」
「人が話してるのにそっちのけで味噌汁すすらないでよ！」
「味噌汁の具は何が好きですか？」
「返事したじゃないか。味噌汁の具？そうだなぁ、やはり定番のワカメと豆腐かな。おっ、この魚美味しい。」
「ふむふむ。好きな料理とかは？」
「ちょっと―！」
夕張がちょっと作戦会議、と言い青葉とまたヒソヒソと話し始める。

「好きな料理とか聞いてどうするのよ！」
「いやあ、いつどこでこの情報が使えるか分からないので。」
「そんな事より私は聞きたい事があるのよ・・・！」
「参考までに聞きますが、何ですか？」
「そりゃもちろん、あの人の体の仕組みよ！いい？妖精になれる人間なんて聞いた事もない存在、研究せざるを得ないわ！」
「技術者魂は揺らぎませんね～、そこが良いのですが。」
「もしかしたらその技術を艤装に応用できるかもしれないし！」
「へぇ～、例えばどんな？」
「それはその技術を手に入れてから考えるわ！」
「でもあの７３１が簡単に流出するような手術を施しますかね？」
「それは今から見ていけば良いのよ！さぁ、やるわよ！」
やっと会話が終わったようでこちらへ向き直る。
しかし、時既に遅し。
俺は既に朝食を食べ終えていた。
「ご馳走様でした。」
「ああ、そ、そんなぁ～！」
俺はその叫びを無視し、食器を返しに行く。
「ご馳走様でした間宮さん。美味しかったです。」
「ありがとうございます。あ、そうです、コーヒーでもどうですか？」
何食わぬ顔で聞く間宮さん。
ここで思わぬ伏兵か。
しかし、間宮さんのコーヒーでは是非に及ばず。
「む・・・。頂きます。」
（（間宮さんグッジョブ！））
俺は孔明の罠にはまり、もうしばらく食堂に居ることになった。
ここぞとばかりにギリギリまで注がれた熱々のコーヒーと共に。

いつか、あの空で（8）

結局、会議には遅刻してしまった。
「申し訳ありません！遅れました！」
「いや、構わないよ。丁度今始めたばかりだ。それよりも、何だか疲れているようだが、大丈夫か？」
「え、ええ、問題ありません。」
「なら良いが・・・。」
提督が心配そうに声を掛けてくる。
なんであいつら俺の身体の事ばかり聞いてきたんだろう？
今回の訓練の随伴艦だろうか、集まってる三人の艦娘も俺の方に気遣うような視線を送る。
あ、この場には大鳳さんも居ましたが俺の事は無視しておりました。
正直に言うと夕張と青葉の質問攻めの所為でかなり疲れた。
しかし、訓練を受けない訳にも行くまい。
俺のそういう心情を察してくれたのか、提督は一つ咳払いした後、また説明を続ける。
「コホン。では、最初から説明しようか。今回の訓練は鎮守府近海にて大鳳所属の飛行隊の発艦・着艦訓練だ。通常は鎮守府湾内でやるのだが、より実戦を意識するためにあえて鎮守府近海とする。」
「はっ！」
「了解しました。」
ビシッと俺と大鳳が敬礼する。
うむ、と頷きつつ提督は話を続ける。
「なお、護衛は妙高、羽黒、朝雲を付ける。その付近に今の所深海棲艦の反応は無いが、万が一の事もある。」
「妙高と申します。共に頑張りましょう。」
「羽黒です。こんな私ですが、せいいっぱい頑張りますね！」
「駆逐艦朝雲よ、任せておいて。」
「ありがとう、心強いわ！」

「よろしくお願いします。」
それぞれ自己紹介を済ませる。
それを確認し、提督が宣言する。
「くれぐれも怪我のないように。では、出撃！」
「「「はい！」」」
「了解。」
出港準備中、俺は艦載機の一つを手の平に乗せ、目を閉じ、意識を艦載機に集中させる。
そして目を開けると、俺はコクピットの中に居た。
支えを失った艦載機は落下していき、その途中でふわりと大鳳の手によって回収される。
こうやって俺は妖精化する。
詰まる所、手元に艦載機が無いと妖精化出来ないのです。
大鳳が艦載機を弾倉にしまいつつ、愚痴をこぼす。
「ねぇ、この変身方法もう少しどうにからならないの？このままだといつか艦載機を傷付けるわ。」
しかし、返答は無い。
艦載機には無線が付いており、通信出来るはずなのだが・・・。
もしや中で何かあったのだろうか、と少し不安になる。
「ちょっと、聞いてるの？ねぇ、もしかして何かあった？」
『こちらすぎたです。もうしわけありません、へんとうがおくれました。』
今度は返答があった。
しかし、これは艦載機からの通信ではない。
弾倉内の設備から通信が入っている。
言うなれば、艦載機内ではなく艦内の通信設備を使っている感じだ。
「ねぇ、何かあったの？しばらく返答が無かったけど。」
『じつは、さきほどのしょうげきでおれのかんさいきのむせんきがこしょうしまして。』
「それって、もしかして私のせい？そんな・・・。」

大事な艦載機を傷付けてしまったのだろうか、と大鳳は落ち込んでしまったようだ。
やっぱりそっちだよな、と思いながら俺は大鳳を励ます。
『いや、どうももとからちょうしがわるかったみたいですね。このようすだとひこうごにどうせこしょうしていましたから、きにやむことはないですよ。』
「そう、なら良いけど・・・。」
『では、これからおれはぶたいのみんなとくんれんのさいしゅうかくにんがありますので、これで。』
「・・・ええ、分かったわ。」
ブツリ、と通信が途絶える。
「さて、そろそろ訓練開始ね・・・。」
不思議、なんかいきなり一人ぼっちになった気分だわ。
そう思いながら大鳳は仲間の元へと向かう。

いつか、あの空で（9）

所変わって、鎮守府近海。
「良い風ねえ～・・・。」
「風を嗜むのも良いけど、そろそろ作戦海域よ？」
「羽黒、索敵機に反応は？」
「反応はありませんね、姉さんは？」
「こちらも無いわ、頃合いね。ではこの辺りで訓練を開始しましょう。大鳳、始めて貰えるかしら？」
「分かったわ、艦載機発艦及び着艦訓練開始！優秀な子達、行くわよ！」
大鳳が風に向かって航行し始め、それと同時にクロスボウを構える。
そして引き金を引く。
矢が風を切る音が響き、そして。
その矢が艦載機へと姿を変える。
艦船の方の空母では発艦に必要な距離の関係で艦爆や艦攻より短い距離で発艦できる戦闘機から発艦させて行くのだが、これでは戦闘機が速度の遅い艦爆や艦攻の発艦を待たねばならず、その分燃料が無駄になる。
だが、艦娘は違う。
艦娘の扱う艦載機は矢などに収納されるので、艦爆や艦攻から発艦させる事が出来る為、燃料の無駄を抑える事が出来る。
今回の大鳳の艦載機の編成は零式艦上戦闘機五二型、彗星、天山、零式艦上戦闘機六二型だ。
発艦の順序としては、俺は天山、六二型、彗星、五二型とか良いんじゃないかなと思います。
大鳳のクロスボウの弾倉の中はしっかりと空母の格納庫になっていた。
何を言ってるか分からないと思うが、とにかくそういう事だ。
鳳翔さんの時に矢も体験したが、これとあまり変わらなかったな。

しかし、一部の軽空母の式神って艦載機から見てどんな風になってるんだろうな。
どうも気になるな・・・。
「こんど、ためしてみたいな。あ、いたいた、おーい、れつきのみなさーん！」
妖精の姿だとなんか言葉使いが幼くなる様な気がしてならないのだが、気のせいだろうか？
「なんでしょうか？」
「およびでしょうか？」
俺は今回の訓練で一緒の小隊になった妖精達の元へ来ていた。
敬礼を交わした後、自己紹介をする。
「どうも、しょうたいちょうのすぎたです。よろしく。」
「よろしくです。」
「たよりにしております。」
「こちらこそ。あ、くれぐれもへんたいはくずさないようにおねがいします。へんたいをはずれたんどくでとんでいればねらわれるかのうせいがたかくなりますよ。では、そろそろおれたちもしゅつげきですね、がんばっていきましょう。」
「はい！」
そうしてそれぞれ持ち場に戻って行く。
俺は自分の機体の整備をしてくれている妖精に声を掛ける。
「どうですか、おれのきたいのむせんきはなおりそうですか？」
「あ、ぱいろっとさん。いやぁ、なんとかおうきゅうしょちはすませましたが、いつこわれるかわからないです。」
「それってつうしんはできるんですか？」
「いまのところはもんだいないです。」
「ならだいじょうぶです、ありがとうございます。ひこうまえてんけんはどのていどまでおわりましたか？」
「ほぼかんりょうしてますです！ささ、はやくこくぴっとへ！」
そう整備士に促され、俺は零戦へ乗り込む。
まずは燃料計を確認、燃料は良し。

座席に身体を固定するバンドを繋ぎ、補助翼、方向舵、昇降舵が正常に動くか確認、良し。
そして、主スイッチを「断」にする。
いよいよエンジン始動だ、おっと、その前に。
俺はエンジンの最終点検をしていた整備員に声を掛ける。
「まえはなれて！すいっちきりました、えなーしゃよろしくおねがいします！」
「はい！」
すると整備員が始動クランクを回し始める。
そして、エナーシャの回転数が最大になったところで、俺は叫ぶ。
「こんたくと！えんじんしどうします！」
叫んだと同時に引き手を引いてエナーシャとエンジンのシャフトを直結させ、さっき切っておいた主スイッチを入れる。
すると、零戦のプロペラが回り始める。
それを確認し、俺はスロットルレバーを前に倒し、燃料を送り込む。
エンジンのシリンダー内に火が入り、エンジンが音を響かせながら始動する。
その後、燃料計や油圧計、回転計が正常か確認し、他の整備員にも離れる様に指示する。
そして、列機の二人に通信を入れる。
「いよいよですか。くんれんですが、きをぬかずにいきましょう！」
『『はい！』』
するとどちらからも心地良い返事が返ってきた。
そしてしばらくして、大鳳から出撃の下知が下る。
「零戦五二型、出撃！」
すると、その場にあった零戦の姿は消え、ただ一機甲板に出たと思えば、何をした訳でもないのに零戦は一人でに加速する。
驚く暇もなく俺は操縦桿を握り、発艦へ操作する。
発艦に成功して間もなく、零戦の視界が光に包まれる。
光が消えると、周りには無数の零戦が共に飛んでいた。
いつ体験しても不思議な発艦だ・・・。

「はっかんにせいこう！つぎはへんたいひこうです、だいごしょうたい！」
『はい、たいちょう！』
『りょうかいです！』
そう通信を入れると、俺の機体の斜め後ろに零戦が二機付いて来るのが見えた。
今度、部隊のマークや塗装でも考えようかな。
あんなに一気に同じ塗装の零戦が発艦すると、見分けがつかない。
それはそうと。
やはり空は、良い。
あんな事があった後でも、恐らく俺は死ぬ時まで。
空に魅了され続けるのだろう。
やはり死に場所は、空が良い。
俺は風防を開け、風を感じながら心からそう思った。
その時、緊急の無線が入った。
『こちら大鳳！艦載機は急ぎ全機着艦せよ！』
「・・・りょうかい。」
おかしい、発艦したばかりだぞ？
まだ着艦には早過ぎる。
それにあの大鳳の切羽詰まった様子。
これは何かあったな。
「だいごしょうたい、きこえていたな、ちゃっかんする！じゅんばんはまもれ、しょうとつじこなんかおこしてくれるなよ！」
『『りょうかいです！』』

いつか、あの空で（１０）

艦娘の小さな艤装の上に着艦しないといけないから、着艦がかなり難しかったりする。
今回も二、三機海に落ちてしまい護衛艦の人達に回収されていた。
幸い、うちの隊から着水した者は出なかった。
そうして全機着艦し終えた後、俺は通信機の元へ駆け寄った。
「こちらすぎた。たいほうさん、なにがあったんですか？」
『他の鎮守府所属の艦隊から救援要請よ！敵の増援により被害が増加中！そして、私達にも緊急出撃命令が出たってわけ！他の艦隊も向かっているわ！』
「そんな・・・。」
『急いで出撃準備を！急ぐわよ！』
ブツッと通信が途絶える。
「てんざんのらいそう、およびすいせいと６２がたのばくそういそげー！」
「２０みりきじゅうのてんけんもわすれるな！たすけにきたせんとうきがせいびふりょうじゃわらいものだ！」
「これはくんれんじゃない、じっせんですよ！」
整備員の妖精達が走り回り、作業している。
そんな騒がしい格納庫の隅でパイロット達が作戦会議をしている。
「いきなりじっせんとは、なぁ。」
そう呟きながら、俺はそこへ合流する。
「いま、させぼちんじゅふしょぞくのくうぼきどうぶたいがこうせんちゅうにてきのぞうえんをうけ、そんがいがかくだいちゅう！かいめつてきなひがいをこうむるまえにこれをきゅうえんする！」
「てきせいりょくのじょうほうははいってないのですか⁉？」
「わかっているだけでくうぼ２せき、せんかん２せき、じゅうじゅん２せき、けいじゅんとくちくかんがたすう！ふらぐしっぷやえりーとかどうかというじょうほうはまだはいっていない！」
「ふらぐしっぷでなくてもそれだけのてきがいるんですよね⁉？そん

なの、かてるんですか⁉?」
「わからない、わからないが、やるしかないんだよ！」
「くんれんがおわればおやつのだいふくをたべられたのに・・・！」
「いってるばあいか！」
これは想像以上にまずい。
いきなり生きて帰れるか分からないなんて、俺には死神が付いているのかもしれんな。
まぁ、知った事ではないが。
『艦載機は発艦準備を！もうすぐ、作戦海域に入ります！』
ああまで混乱していれば、作戦もクソもないだろう。
「だいごしょうたい、じっせんです、がんばりましょう。」
「たいちょうは、こわくないのですか・・・？」
「こんなさくせん、いきのこれるのでしょうか？」
おや、かなり弱気じゃないか、ウチの列機は。
もしかして・・・？
「もしかして、じっせんははじめてですか？」
「は、はい・・・。」
「そうです・・・。」
確かに、初めてでこの作戦は辛いな・・・。
どちらもいまにも泣き出しそうだ。
これじゃあいけない。
ここは一つ、先輩風を吹かせてみよう。
「いいですか？まず、へんたいはくずさない。これはぜったいじょうけんです。つぎに、おれがうてばひょうじゅんきなんてきにせずうってください。それできょうどうげきついになります。まぁ、こんなのにげだしたいとおもうでしょう、でも」
一呼吸置いて、おれは宣言する。
安心させる様に、笑みを浮かべながら。
「だまって、おれについてこい！」
「「・・・・・・はい！」」
そう返事した二人の顔は、先程までとは明らかに違っていた。

なんだ、そんな良い顔も出来るじゃないか。

いつか、あの空で（１１）

「くそっ、こいつらどれだけいるのよ！」
「瑞鶴！気を抜かないで！」
「分かってるって翔鶴姉！あっ、矢矧、危ない！」
深海棲艦の多さに思わず瑞鶴が悪態を吐き、それを翔鶴が諌める。
その時、随伴艦の矢矧に砲撃が命中する。
それでも矢矧は尚のこと、前に出ようとする。
谷風、浦風、磯風もその後に続く。
この中に誰も無傷の者は居なかった。
「ぐっ、まだ、まだよ！私を沈めたいなら、魚雷五、六本撃ち込まないと・・・駄目よ！」
「矢矧さん！こいつらよくもっ、ちっくしょーめ！」
「ちっ・・・撃って撃って撃ちまくれ。」
「いやぁ！痛あ、ちっと失敗・・・！」
だが、次第に皆の損害が酷くなっていく。
敵の数が多過ぎる。
このままでは・・・。
翔鶴の脳裏に嫌な考えが浮かぶ。
「ッ！翔鶴さん、直上！」
「えっ⁉？も、もう！なんで私ばっかり！」
「言っとる場合じゃないじゃろう！」
運良く爆弾は翔鶴を逸れるが、いつ当たるか分かったものではない。
「やるなぁ・・・数がだんちか。だが負けない。」
「あれは、くそっ、敵の新手来ます！」
「待って！あれは、援軍⁉？」
「優秀な子達、本当の力を見せてあげて！」
その叫びと共に大鳳の艦載機が風を切り飛来する。
「くそっ、せんとうかいいきにいちばんのりか！だいごしょうたい！いくぞ！」

『『はい！』』
翔鶴達の上空の制空線を確保する為、大鳳の艦載機が翔鶴・瑞鶴の航空隊と合流する。
それによって少しずつだが、制空権を取り戻しつつある。
さらに。
「妙高、参ります！」
「あなた達の背中は、私達が守ります！」
「素敵じゃねぇ、助かるけぇの！」
「ここからが私の本領発揮よ！皆、巻き返すわよ！」
「がってん！」
「まだまだいける、舐めるな。」
味方艦隊も妙高さん達が合流し、戦況を巻き返しつつある。
だが・・・。
「くっ、かずがおおすぎる！いくらおとしてもまだまだでてくる！」
航空隊は敵の物量に苦戦していた。
ただでさえ墜とされて減っていくのに、この状態で零戦を攻撃隊の護衛に回せば、せっかく取った制空権を手放してしまうだろう。
その時、上空に敵編隊を発見した。
ここからでは、戦闘機か艦爆かの区別がつかない！
「っ！てっきをぜったいにかんたいのじょうくうにいかすな！」
何が空母二隻だ、倍はいるんじゃないのか⁉？
俺は機体を上昇させながらそう愚痴る。
「翔鶴姉！今よ、第二次攻撃隊、稼働機全機発艦！」
「ええ！全攻撃隊、発艦始め！直掩隊も攻撃隊の援護に向かって！」
海上では二人の空母から次々と攻撃隊が発艦させている。
それに伴い、五航戦所属の零戦達が次々と護衛に回る。
必然的に、艦隊上空の直掩機は減っていく。
と同時に、深海棲艦の艦載機も攻撃隊に向かっていく。
「ばかな、こうげきたいにしねっていうのか⁉？」
確かに攻撃隊を堕とそうと敵も向かうだろう。
そのお陰で、艦隊上空の制空権は取りやすくなる。

制空権が取れれば、妙高さん達も戦いやすくなるはずだ。
だが、攻撃隊はどうなる？
確かに、爆撃や雷撃を成功させ、敵艦を沈めている機もいる。
だが、あんな敵だらけの中に突っ込んでは、帰還は絶望的だ・・・！
あれではまるで的だ・・・！
艦攻や艦爆達が次々と堕とされていく。
「ああ、そんな・・・。でも、こちらもてがはなせない・・・！」
俺はそう呟きながら敵編隊の後ろへ着く。
標準を合わせ、機銃を掃射。
俺の後ろからも列機二機分の曳光弾が飛んで行く。
それらは編隊の後ろの方の数機へ当たる。
火を噴きながら堕ちていく敵機達。
俺達に気付いた敵機達が下に回避行動を取る。
「このままかんたいごえいをさいゆうせん！あしのおそいやつはゆうせんしておとせ！」
そう言い敵機を追いかけ機体を降下させる。
列機もそれに着いて来る。
そして、残りの敵機を堕とした後、それを見つけた。
目につくのは、赤と青の袴。
最強の機動部隊と名高い第一航空戦隊。
その空母の名を引き継ぐ艦娘達。
通称一航戦、「赤城」、「加賀」。
数多の深海棲艦を葬り続ける最強の空母達の姿が、そこにはあった。

いつか、あの空で（１２）

「敵艦隊を発見！ふっ、我が艦載機から逃れられると思ったか！」
「敵はかなりの数ですね、姉さん。」
　随伴していた利根と筑摩から敵艦隊発見の報が入る。
「先行します！味方艦隊の援護は任せてください！」
「さぁ、砲雷撃戦、開始するわよ～！」
　それを受け、比叡と霧島が航行速度を上げていく。
　それに続き、利根や筑摩も速度を上げる。
　後方では、二人の空母が弓を番える。
「慢心してはダメ、全力で参りましょう！第一攻撃隊、発艦始め！」
「五航戦の子なんかと一緒にしないで。攻撃隊、発艦。」
　軽口を叩きながら、視線は敵を捉え続ける。
　そして、二人の空母から次々と艦載機が発艦して行く。

　一航戦、彼女らが合流してから戦況は一変した。
　瞬時に制空権を確保した後、敵艦隊へ攻撃を開始した。
　驚くべきは、その命中率と生還率。
　敵から見て、これほど恐ろしいものもあるまい。
　五航戦とは爆撃や雷撃の命中率が段違いだった。
　それに、なんと言っても艦爆や艦攻が堕とされないのだ。
　護衛機もさることながら、艦爆や艦攻がまるで敵の対空砲火が来るところをあらかじめ知っているかのような動きを見せる。
　第一攻撃隊で堕とされたのはそれぞれ二、三機程だろう。
　それに味方艦隊に戦艦二隻と重巡二隻が合流していたのも大きい。
　あれだけいた深海棲艦はかなり数を減らしていた。
『この際、徹底的に撃滅しましょう！第一攻撃隊、出撃！』
　間髪入れず、大鳳が攻撃隊を出撃させる。
　今は一航戦も合流しているし、五航戦の戦闘機隊も艦爆や艦攻の再装備待ちで戻って来ている。
　これなら、大鳳所属の戦闘機隊が丸々いなくなっても問題は無さそ

うだ。
「だいごしょうたい、こうげきたいのごえいにまわるぞ！」
『『はい！』』
俺達は先程の戦闘で機体の高度を下げていたので、艦攻の護衛に回る事にした。
味方の制空域を抜ければ、敵艦載機が艦攻に襲い掛かってくる事が格段に増える。
天山は彗星に比べ足が遅い。
しっかりと敵を追い払わなければ簡単に堕とされる・・・！
「てんざんたいよりこうどをあげろ！そうすれば、てんざんたいのうしろにはりついてくるてきにたいしょしやすくなる！はいめんひこうもわすれるな！」
『『りょうかい！』』
そうして他の隊とも協力して敵機を追い払い、ついに敵の対空砲火射程内まで来た。
ここまでくれば、敵機はもういない。
ここで飛んでいると誤射される可能性があるからだ。
そして、俺達護衛機もここで離れる。
敵機がいない以上、護衛機も必要無いからだ。
「すまない、ここまでです。てんざんたい、ぶうんをいのります・・・！」
『まかせてください、わたしたちのちーむはあうんのこきゅうです！かならずやてきをしずめてみせます！』
そう通信を交わし、俺達は撤退する。
その後、しばらくして深海棲艦の大部隊はその数を大幅に減らしつつ撤退、戦闘はこちらの勝利となった。
ただ、戦闘が終了し大鳳の艤装に帰還した後も、あの時通信を交わした天山の乗組員達とは遂に会えなかった。
こんなときだけ無線機が壊れないのだから、嫌になる。
今回の出撃で、未帰還機が出てない部隊は無かった。
格納庫内は、重苦しい空気に包まれていた。

朝いた奴が、夜にはいない。
戦場では当たり前なのだろうが、やはり慣れないな。

いつか、あの空で（１３）

鎮守府に帰ってこれた頃には、もう日は暮れてしまっていた。
「皆無事か⁉？怪我はないか⁉？」
鎮守府に帰還すると提督さんが血相を変えて走って来た。
ここまで心配してくれるなんて、いい提督さんに恵まれたかもしれないわね。
「はい、皆無傷ではありませんが、沈んだ者は誰一人おりません。」
「そうか、良かったぁ・・・本来ならこの鎮守府から他の艦隊も向かわせるのに、すまなかった。」
「長門さん達はこの鎮守府の防衛を任されているんだもの、仕方無いわ。それより、提督さん？すまなかった、じゃなくて他に言う事があるんじゃない？」
そうおどけて言うと、提督さんはハッとした様な顔で言葉を紡ぐ。
「そうだな、皆、お疲れ様。全員生還してくれて、ありがとう。」
「「「はい！」」」
その時、私のクロスボウの弾倉の一つが輝き出し、何かが飛び出す。
「ん、ああ、ここはまだ工廠じゃありませんでしたか。お、提督殿。」
提督さんに敬礼しながら間抜けた事を言う男。
言わずもがな、杉田庄一上等飛行兵曹だった。
「菅野でいい。お疲れ様、どうだった、その姿での初の実戦は？」
「上々であります。これならいけそうです。」
「うむ、今回皆が無事に帰って来たのは君の働きも大きいだろうな！」
「・・・・・・そうですかね。」
提督さんが笑いながらそう言うと、杉田さんは一瞬だけ目を伏せた後、歯切れ悪く答えた。
何かあったのかしら。
でも、まぁ、頑張っていたわね。
「よし、では傷の深い者から順次入渠する様に。入渠が長引く様であれば高速修復材も使って構わない。それと、今夜はきちんと休息を取る様に。では解散！」

「「「はい！」」」
「了解です。」
各自、装備を工廠に置いたり入渠したりする為に移動し始める。
それにしても・・・。
「杉田、ちょっと良いか？」
「何ですか、提督殿？」
「・・・まぁいい。それで、頭のそれは、何かね？」
「えっ、何かいます？」
「妖精さんが二人、いるのだが。」
私もさっき見た時から気になっていたのだけれど、杉田さんの頭に二人の妖精さんがくっついていた。
あれは何？
すると、妖精さんが交互に話し始める。
「すぎたさんがへんたいをくずすな、ともうしていたので！」
「どんなときもついていきます、はい！」
「・・・そんな訳らしいです。」
妖精さん達の言葉に、杉田さんがやれやれといった風に付け加える。
その姿を受けて、提督さんがほっこりした表情になる。
不覚にも、私も可愛いと思ってしまったわ・・・。
「ま、まぁ良いじゃないか、可愛いし。」
「困ってはいませんが、艤装にすぐ戻したほうが良いですかね？」
「いいんじゃないかしら、別に困ってはいないし。」
「そうですか。では、これで失礼します。」
「いきましょう、すぎたさん！」
「むかうところてきなしですね！」
杉田さんははぁ、と溜息を吐きつつ立ち去って行く。
頭に二人の妖精さんを乗せたまま。
その姿がおかしくて、つい独り言を言ってしまった。
「ふふっ、不思議な人。それに、戦犯だと聞いていたけれど、なかなか空戦の腕はあったわね。」

「・・・戦犯だと?大鳳、それはどこで聞いた?」
すると、提督さんが先程とは違い、とても恐ろしい顔で問いかけてきた。
何かに憤っている様な、そんな表情で。
その変貌ぶりに驚きつつ、私は答える。
「だ、大本営ではかなりそう言われてきました。十分な兵力であったにも関わらず山本長官をむざむざ死なせた、と。」
事件の詳細などは調べる事は出来なかったけど。
それを受け、提督さんは苦虫を噛み潰した様な顔で話し始める。
「・・・・・そうか。だがな、大鳳。それは違う。」
「・・・えっ?」
その後、提督さんから聞かされた話は私のあの人への評価を覆すものだった。

いつか、あの空で（１４）

「まさか、こんな所まで付いてくるとはねぇ。」
「もしかして、めいわくでしたか？」
「そんなばかな、うらめにでたか⁉？」
　妖精さんってこんなに自由行動出来たんだ。
　初めて知った。
「いや、迷惑とかでは無いよ。そうだね、それじゃあせっかくだし今日飲みに行かないか、愛する列機達。お互いの仲を深める為に、よ。」
「そ、そんな、あいしているだなんて！」
「か、かんげきであります！」
　軽口のつもりだったのだけど、本気にされたみたいだ。
　まぁ良いか。
「じゃ、鳳翔さんとこにしようか。食堂では酒は出ないだろうし。」
「りょーかいしました！」
「さすがにきぶんがこうようします。」
「・・・それは誰の真似だ、長門さん？」
「ちがいますよ、まぁわたしたちもちょくせつほんにんからきいたことはないですけどね。」
「きょうおせわになったいっこうせんのこわそうなほうです！」
「あー、そうなの？それは分からんわなぁ。」
　なるほど確かに言いそうな感じだ。
　でも加賀さんが本当に怖かったらこの会話聞かれた瞬間に俺達死んでる。
「加賀さんにこの話聞かれたらまずいんじゃない？」
「けされますね、こなみじんに。」
「がいしゅういっしょくよ、しんぱいいらないわ。」
「多分それも加賀さんだろやめとけよ、死人が出るぞ・・・。」
　主に俺達の中から。
　などとくだらない事を話しているうちに、目的地に着いていた。
　頭の妖精達を気遣い暖簾を手で持ち上げてから扉を開ける。

「ども、鳳翔さん。」
「あら、杉田さん、いらっしゃいませ。あら？妖精さんがこのお店に来るのは珍しいですね。」
「おはつにおめにかかります！」
「ふつつかものですが、よろしくです！」
「なんか挨拶の違和感凄いな・・・。まぁ、なんか懐かれてしまって。」
「ふふっ、微笑ましいですね。杉田さん、今日はお疲れ様でした。初出撃、どうでしたか？」
　人の良い笑顔を浮かべながら、鳳翔さんが問いかけてくる。
　何だろうな、この人には全て打ち明けたくなるこの感じは。
　そのせいだろう、ここで本音を吐いてしまったのは。
「・・・護衛を務め、唯一通信を交わした天山が、未帰還になりました。他にも、多くの艦載機が未帰還になりました。」
　鳳翔さんは悲しげな表情を浮かべ、それに返事をしてくれる。
「・・・そうでしたか。それは辛かったですね。でもそれは」
「仕方無い、ですか？俺はもう逃げるわけにはいかないんですよ。少なくとも、そんな言葉に逃げる権利はないんです。」
「・・・そうですか。」
　そう呟き、より一層悲しげな表情になる鳳翔さん。
　列機たちもそれを黙って聞いていた。
　おいおい。
　せっかく飲みに来たんだ、ここで盛り下がってどうするんだ。
「すいません、鳳翔さん。お酒と何か食べるものを列機たちの分も含めてお願いします。」
　俺は無理やり笑顔を作ると、注文する。
「えっ、あ、はい。食べるものはおつまみですか？それとも晩御飯ですか？」
「あー、晩飯まだなんでしっかり食べたいですね。」
「おねがいします！」
「わーい、ほうしょうさんのごはんだー！」
「分かりました、ではお作りしますね。」

そう言って鳳翔さんが調理を開始する。
する事もないので、店の中を見渡したりしてみる。
昨日騒いでいた隼鷹ら軽空母達はその姿を見せていない。
どうしたんだろうか。
二日酔いとかなのだろうか。
「隼鷹さん達は二日酔いではありませんよ。無駄に肝臓が頑丈ですから。」
「・・・声出てましたか？」
「いや、なんとなくそんな事を考えていないかと思いまして。当たっていたようですね。」
調理の手は止めず、それでもこちらを見ながらクスッと笑う鳳翔さん。
なんだろう、すごく可愛いのですが。
俺は誤魔化す為に会話を続ける。
「で、飲んだくれは今日は来ないのですか？」
「いや、どうでしょうね。昨日の様に騒ぐ事もあればフラッと来て静かに飲んだりもしてますから、なんとも言えないですね。」
「・・・あれが静かに飲むんですか？」
意外だ。
あんな騒いでる奴が静かに飲んだりもするなんて。
「ふふっ、隼鷹さんは静かな時はかなり魅力的なんですよ？」
「ちなみにそれはどのくらいの確率で見れますか？」
「うーん、その珍しさを例えるならクワガタムシの雌雄同体並みですね。」
「・・・・・・そうですか。」
なんか例えが専門的すぎる。
そして例えから考えれば隼鷹の静かな時は高値で売買されているらしい。
まぁ、一度見てみたいではあるからな。
「列機達、今日はお疲れさん。初めてで生き残れれば次もきっと大丈夫だろう。」

「そうなんですか？」
「でも、またあんなてきにあってしまったら？」
「ん、そうだなぁ、まぁあれだけ損害を与えたんだ。しばらくは大人しくなるだろう。だから・・・」
「「だから？」」
　俺はニタァと意地の悪い笑みを浮かべて告げる。
「次の出撃まで俺が直々にしごくよ。なぁに、二度とあんなみっともない真似はさせるものか。」
「ひ、ひいいいぃ！」
「お、鬼がいる！」
「とりあえず月月火水木金金、いっとく？」
「「いやぁぁぁぁー！」」
　大げさに怯える列機達を見て、俺は少し安堵する。
　良かった、初出撃のショックとかは残ってないみたいだ。
「程々にしてあげてくださいね？お酒と料理です、どうぞ召し上がれ。」
「おっ、これは？」
「今日はブリの照り焼きですね。良い魚を仕入れられたので。」
　確かにかなり旨そうだ。
　これは早く食べたいな！
　あ、もう一つ、注文し忘れていたな。
「すいません、鳳翔さん。」
「なんですか？」
「ここって、大福とかってありますか？」

いつか、あの空で（１５）

「ここら辺で良いかな、っと。」
晩飯を食べ終わり、鳳翔さんの店を後にしてその足で埠頭に来ていた。
列機達は眠ってしまったので工廠に持って行った。
その時、夕張に遭遇してしまわなかった事は幸運としか言いようが無い。
俺は、酒と大福を持ちながら腰を下ろす。
そして、一つの大福を海に落とし、もう一つを口に運ぶ。
「工廠で他の奴らに振る舞われたやつとは違うけど、それでも美味しい大福だ、美味しさは俺が保証する。どうか皆で分けて食べてくれ。そして、後は俺達に任せてゆっくり休んでくれ。」
酒を御猪口に注ぎ、海に捧げた後、他の御猪口にもう一度注ぎ、ぐいっと一思いに飲み干す。
また俺は、生き残った。
いつもならそこで自虐になるのだが、今は違う。
俺は、今回の戦闘で死んでいった妖精さん達の事を無駄にすべきでは無い。
その為にはどうすれば良いのか。
その為に俺は何が出来るのか。
止まっていては、意味が無い。
何より、死んでいった者達に失礼だ。
そうか、そうだよな。
俺は今まで山本長官や死んでいった小隊の奴らに失礼な事をしていたのか。
「俺に出来る事を、精一杯やる。供養にはこれしか無いのかもしれんなぁ・・・。」
そうと決まれば先ずは、航空隊の熟練度だ。
大本営のエリート部隊だけあって技術はそれなりだが、それだけだ。

実戦では経験こそ光る。
これから強くなっていく。
少しでもそれの手助けになれば良い。
「まずは列機達の空戦の腕を上げてからだな。でも、初めての実戦で生き残れたのは大きい。ほとんど帰ってこれないからなぁ。」
空を見上げながら、独り言を呟く。
しばらく物思いにふけっていると、背後から足音がする。
その方向へ視線を移せば、大鳳を見つけた。
どうしたんだろうか。
まぁ、話し掛けてもろくな事が無さそうなので、気にせず酒を飲み続ける。
そうして、御猪口に酒を注ごうとした時、ちゃぷん、と徳利の中の酒が揺れる。
それに聞き取り、こちらへ気付く大鳳。
「・・・・・・・あっ。」
「・・・・・・・げっ。」
地獄耳さんめ。
あー、しくじったなぁ。
俺から先に退くべきかなぁ。
「あ、あの、えっと、その・・・」
すると大鳳は、もじもじしながらなにやらブツブツ呟いている。
何か言いたいのかねぇ。
取り敢えず、質問してみよう。
「この辺に何か忘れ物でもしたんですか?」
「あ、いや、そういうわけではないのだけど・・・。」
「んー、もしかして邪魔ですかね。じゃあ直ぐ退きますよ。」
「そうじゃなくて!あ、そうじゃなくて、その、えと、ごめんなさい!」
突然謝ってきた。
何に対しての謝罪なのだろう。
「ごめんなさい、私はあなたの事を誤解していたわ。あなたの悪評を大本営にいた頃に散々聞かされていたもの。でも、おかしいと気付く

べきだった。だって」
「あー、その事ですか。良いですよ別に、気にしてませんから。」
「え、ええ⁉？」
あっけらかんと言い放った俺に対して目を見開いて驚く大鳳。
そんなに驚かれても。
「どれだけあなたの認識を改めたって、いくら理解してくれる人を作ったって、それで罪が消える訳じゃあない。」
「・・・・・・・・。」
「努力すべきなのはそこじゃなくて、次また同じ事を繰り返さない為にどうすべきかだと思うんだ。だから、別に謝らなくたって良いんだ。」
人に言われ続けるからこそ、悔い改めようと思える。
後悔し続ける。
そして、次に活かせる。
「そんな・・・・・・・。」
一気に大鳳が暗い表情になる。
折角の美人がそれじゃあいけない。
ここは一つ、粋な台詞でも吐いてみるか。
「今日は月が綺麗ですし、こっち来て一緒に飲みませんか？」
「えっ、ええ！い、いきなり、そんな！」
ん、いきなり？
まぁ、唐突過ぎたかな。
似合わない事をしたよなぁ、うん。
「あー、すみません。つい、寂しかったので。では、これで。」
俺は徳利と御猪口を片付け、帰ろうとする。
それを大鳳が慌てて止める。
「あ、違うの！嫌なんじゃなくて、心の準備が！」
大鳳は言ってからカアァ、と頬を朱に染める。
そして、数回深呼吸をして、宣言する。
「不束者ですが、よろしくお願いします！」
だからさぁ、その挨拶流行っているのかよ。

数時間後、酔い潰れた大鳳を背負って寮に向かう所を青葉に見られて鎮守府中で噂になってしまっていたのは、また別のお話。

いつか、あの空で（１６）

翌日、俺は執務室を訪ねていた。
演習を行うためのの提督の許可を貰う為である。
「演習許可？流石だな杉田、えらく熱心じゃないか。つい先日大きな戦闘を終えたばかりだというのに。」
「いや、あの時に本当は演習する予定だったじゃないですか。それが救援要請で無しになっていたので、その埋め合わせのようなものですね。」
「と言っても、つい昨日の事だ。今日くらいはゆっくりしても良いんじゃないか？」
まぁ、確かに休息は重要だ。
それは変わりない。
だが、俺は列機達に早急に身につけて欲しいのだ。
少しでも多く、生き残るための術と知恵を。
「鉄は熱いうちに打てって言うじゃないですか。」
「・・・なるほど、まぁ良いだろう、許可する。使用する機体は旧式だが零戦の二二型でいいんだな？まぁ、五二型があるから使用していないし、大鳳の部隊は先日の出撃のせいで整備中だからか。ん？二二型は二機でいいのか？」
俺の考えを知ってか知らずか、少しの沈黙の後提督殿が許可を下してくれる。
そして、二二型の申請台数が二機である事に気付き、怪訝な顔をする。
俺は、それに対して説明する。
「はい。俺が使う機体は六二型の予備機です。爆装ではなく同重量の模擬弾を装備させますが。」
ハンデとしてはこれくらいが良いかな。
艦爆も使ってみたいし。
まぁ、あれをただの艦爆と言うには少し語弊があるかもしれないけど。

「ほぉ?面白そうだな、朝の職務が片付けば観に行こう。」
「まぁ、どうなるかは分かりませんよ。六二型は繊細な機体ですから、無理に飛んでしまえばすぐにお陀仏です。でも、多分大丈夫でしょう。」
「大した自信だな、ますます楽しみだ。では、頑張ってくれたまえ。」
「はっ、では、これで失礼します、提督殿。」
俺は敬礼した後、執務室を後にする。
さぁて、存分にシゴいてやろうかな。
「菅野で良い、と何度言えば良いのだろうなぁ。」
ぼそりと呟いた彼の一言を、聞く者は誰一人いなかった。
しばらくして、また執務室の扉が叩かれる。
「提督、失礼します。」
「ああ、大鳳か、どうかしたのか?」
入って来たのは、またもや先日の戦闘に出撃していたメンバーの一人である大鳳だった。
「いえ、その、杉田さんを探しているのですが、どこにもいなくて。提督さん、どこにいるか知りません?」
「んー、杉田の奴は・・・いや」
菅野はニタァと意地の悪い笑みを浮かべると、大鳳へこう告げる。
「杉田の居場所を教える代わりに、職務を手伝って貰おう!」
「えっ⁉?ま、まぁ、そのくらいなら良いけれど。それならさっさと片付けちゃいましょう!」
実に大人気ない提案に対し、最初は驚いたものの、大鳳は二つ返事でそれを了承する。
「おっ、良いのか?いやー、助かるよ。秘書官の長門は駆逐艦の演習の監督しに行ったっきり戻ってこねぇし、他の面子はこういう雑務はやりたがらないからな。」
「お安い御用です!で、どのくらいまでやれば良いの?」
「取り敢えず朝の分だから、こんくらいかな。ほい半分。」
「あら、これだけ?これなら直ぐに終わるわね!さて・・・え?」
大鳳は早速一枚目の資料に目を通す。

そしてその後にすぐ固まってしまった。
「どうした？分からないものがあったか？」
「てっ、提督、その、これは？」
「ん？何々、『ケッコンカッコカリ』か、確か艦娘強化の方法の一つだったな。全く、強化にしてももっと他の形があったろうに。」
「・・・・・・。」
「んん⁉？顔が真っ赤だぞ大鳳⁉？どうした、具合でも悪いのか？」
ぷしゅーと頭から蒸気を放ちつつ、それでも大鳳はその書類から目を離さない。
菅野は怪訝に思っていたが、ふと今朝見た青葉新聞の記事が頭をよぎった。
そして、妄想の世界へ旅立っている大鳳にこう告げる。
「大鳳さん、大鳳さん。」
「えっ、あ、はい！な、何かしら⁉？」
「この『ケッコンカッコカリ』は、なんと！提督以外とも効果を発揮するらしいんだよ。」
「・・・・・・・。」
「いやー、大抵の場合艦娘は提督の任に就いてる奴以外とあまり交流がないから提督を選ぶけど、たまに普通の士官とかと付き合ったりしてる奴もいるらしいんだよねって、大鳳さん？」
「・・・・・・・。」
何度呼びかけても大鳳からの返事は無く、それどころか大鳳は後ろ向きに倒れてしまった。
倒れた大鳳が床に頭をしこたま打ち付ける一歩手前で菅野はなんとか支える事に成功する。
そして、そのまま生存確認へと流れるように移行する。
「おーい、もしもーし？あちゃー、こりゃダメだ、完全に意識失ってるわ。」
菅野は取り敢えず大鳳をソファーへ運ぶと、ため息をつきつつ呟く。
余計な事をするんじゃなかった、と。

そんな菅野が大鳳に渡さなかった方の書類の束。
その一番上の書類のタイトルは、『妖精化検体志願書』。
菅野がその書類に目を通しつつ、ぼそりと呟く。
「あぁ、早く源田司令帰って来ねえかな・・・。」
この菅野もまた、空に魅せられた男の一人であった。